

『五感フル稼働』

プログラムで受講した講義と漢城大学校での生活

漢城大学校はソウル市内の、ソウル駅から北東に位置した坂の上にあり、眼下に昔ながらの韓国の家々、その先に高層マンションがそびえ立ち、今と昔が共存するソウル市街地を眺められる緑豊かなキャンパスです。

プログラム中に受講した講義は、韓国語の概要、政治経済の概論、および大衆文化や現代社会についてで、現地の日本人の先生によるものでした。参加者の韓国語の習得度が全くの初心者から簡単な日常会話ができる者まで様々でしたので、言語の授業内容は初心者に合わせていただきました。私も今回の参加がきっかけで韓国語を学び始めたので全くの初心者でしたが、先生の丁寧な指導かつ少人数のおかげで授業に取り組みました。韓国語の授業の際には漢城大の学生も一緒に受講していたので、ネイティブの発音で勉強することができました。

プログラム中は、午前中は講義、午後は観光および文化体験の日程でした。世界遺産・昌徳宮 や国立博物館、北朝鮮との国境から2kmの停戦地帯・DMZといった観光地や、ソウルから車で約1時間の陶磁器とお米が有名な利川(イチョン)広域市にも行きました。利川では、漢城大の教授であり韓国を代表する芸術家の Cho Youl 先生のアトリエと、Cho 先生の芸術家仲間の陶芸家の先生のアトリエにもお邪魔しました。

また、プログラム期間中に秋夕(チュソク)という韓国のお盆があり、講義は休講のため、お盆に多くの人が集まる景福宮(キョンボックン)に行きました。秋夕のため、王朝時代の民族衣装を着たパフォーマンスも見られました。

ソウル市内は、繁華街はもちろん、つねに人の流れが多くにぎやかで活気があふれていました。夜、屋台が軒を連ねる一体はお酒や屋台料理のコチュジャンやゴマ油がまぎって食欲をそそる匂いと人々の熱気が混ざり独特のにおいを放っていました。そのにぎわいは深夜遅くまで続きます。またソウル市内には大学が数えきれないほどあり、大学の周辺にはたいてい小さな繁華街があります。そのためソウル市内はどこも人で賑わっています。

今回、プログラムに参加し、一番印象に残ったことは、若い人たちの日本への関心と日本語力です。期間中お世話をしてくれた漢城大学校の学生との会話はすべて日本語で、日本人同士で話すペースで会話ことができました。彼らは日本語専攻の学生ではなく、独学で学んでいるそうでした。日本語を専攻して半年という学生でも簡単な会話ことができました。また、市内で出会った若い人の中にも、日本語が少しわかる人も多く、来日経験がある人や来日予定のある人にも数名会いました。

このような背景には、韓国の激しい進学や受験事情にも示されるような、何かを学ぶ際の強い姿勢が表れていると思います。

私は海外渡航は初めてで、英語圏ならまだしも、完璧な英語圏ではない場所では生活の不安がありました。しかし、無知な状況で飛び込んだため、かえって刺激になり勉強しました。そしてその一歩がきっかけとなり、今はもっと韓国文化を学び、また近いうちにソウルを訪れたいと考えています。異国文化への学習意欲を駆り立てる、刺激ある経験になりました。



fig.1. 講義室にて先生(中央)と研修生



fig.2. 世界遺産・昌徳宮



fig.3. 漢城大学校



fig.4. 南大門市場



fig.5. 景福宮 光化門前



fig.6. 南大門